

永遠の18歳！ドラゴンの兄貴

張玉龍 さん

昭和8年台北生まれです。と、日本語で自己紹介される張玉龍さんは、台湾・永和登山委員会顧問、台湾登山教育推進協会副理事長であり、国際青少年環境体験登山などを通し、HAT-Jとは深いご縁があり、一度お目にかかったことのある方々には、その明るくエネルギッシュな個性は深く思い出に残っているのではないかと思います。今回は、HAT-J主催の「大人のための自然環境体験国際交流 in 香港」に台湾から5人の仲間を引き連れて参加して下さった張さんにお話を伺いました。

(インタビューと文：張晶子)

◆山との出会いは

一山に登ろうと思ったわけではなくて、子どもの頃から登らされたんですよ。お父さんにね。休みになると、よく郊外に連れ出されました。魚釣りであったり、自然の中を歩くことは、それが習慣として身につけてしまったわけです。休みになったら山へ行くのは当たり前のことでした。兄弟は、男が7人と下に女の子が2人いました。私は長男で、家は先祖に科挙合格者を出したこともある古い家系だったので、厳しくされました。340年くらい前に大陸から台湾に渡って20代目になる我が家では、母は別格として、父に次いでナンバー2の立場で、弟たちの手本にならなければなりません。なんでも一番多くやらねばならないし、一番良く出来なければいけないんですよ。父親からはたくさんのことを教え込まれました。長男はいつでも父の次に威張っていなければならないのですが、威張るためには、それだけの中身が伴わなければならないので、良い循環ではありましたね。人間は努力しなければならないということを教えられました。勉強を強制はしないけど、本をたくさん読めと言われました。父は絶対で、間違いは起こさない男でした。

◆本格的な登山は大学からですか

一その頃、一般人は台湾の山に登ることは出来なかったんですよ。高砂族と接触してはいけないという日本政府の方針があった。山に登るには、電力会社に入るか、林業従事者、警察官でなければならなかったが、終戦後、大学を卒業した時に、中国青年協会の中の中国青年登山会に入りました。新高山などの高山登山は統制されていましたが、毎年一度の登山のイベントがあり、その時には、青年登山会の会員は指導者として登ることが出来ました。指導員になるために、郊外の山野を歩き、訓練を受けました。台湾の登山界には全然知識がありませんでしたが、日本の台湾総督府登山会が残した本などを引き継ぎ、山の装備や技術などを得たのです。実際は

アメリカ軍の放出品のリュックやテントを使っていましたね。

◆海外の山に行くきっかけはどんなことからですか。

—日本との交流が深まったのは、日本から来た登山学校のみなさんの、新高山（玉山 3952m）登山のお世話をしたときからです。40年くらい前のことだったと思います。それから、みなさんから本を送っていただいたりして、山の情報がどんどん入るようになりました。

日本語が出来るので仕事で日本に行くチャンスもありました。

—初めての海外の山はネパールで、20年くらい前だったと思います。その頃、「雪と岩の会」という会を作りました。また、大学の登山部の指導などもしていた頃でもあります。日本から「わらじの仲間」の方々が台湾にきたときには沢登りもしました。神崎さんと知り合ったのもそのときです。

台湾メンバーで最初にエベレストへ行ったのは、1993年のことです。これは大陸と合同でした。ベースまでの準備はすべて北京側が手配し、ベースから上の装備については台湾側で準備しました。頂上には、チベットと台湾と大陸と、一人ずつの登頂でした。95年には台湾隊で行きました。このとき、ベースキャンプで神崎さんに会いました。1日おきに日本隊のベースに行って、気象情報を見せてくださいという名目で、コーヒーをいただきに行きました。ここまでは北京側からでしたが、それ以降毎年ネパールに行っています。僕はネパールが好きですからね。

—ネパールは山が大きい。高さもあるし、綺麗です。旧英国領の国々は、英国式の良い制度を残している部分があります。ポーターにテントを背負ってもらえば、たくさんの人に直接お金が払えるでしょ。僕にとってはヒュッテよりテントの方が気持ち良いし、身体にも良いですね。僕が連れて行くグループは、本当に山が好きで自然が好きな人たちですよ。シェルパから見たら独特なグループです。自然に詳しくて、彼らを尊重し、礼儀正しい。ドラゴンのグループは尊敬されるグループと言われますよ。

◆台湾の山はどんな山ですか。

—基本的には、日本と似ていると思います。山に降る雨は2時間もしたら川へ流れて行ってしまふ。谷が険しい、湿気も多い。冬の雪はとても湿気が多い雪です。シャーベットみたいな雪は、消えて浸みる。そして凍みる。乾いた雪ではないので、掃っても掃っても濡れてしまふ。厳しい雪です。この16年、毎年大学生を連れて冬山に入っています。基礎訓練しかしてやれませんが。

新高山（玉山）は68回登ってますよ。

—台湾では、山を休める期間があります。1月から2月にかけて休めることがあるんです。短い雪山期間に登れないので、台湾の人は雪山の経験を積むチャンスがさらに少なくなってしまうんですよ。それ以外の季節も抽選で1日90人だけしか登れません。理由は、山小屋の収容人数と水の供給力の問題です。テント利用者を含めてもプラス30人、合計120人が最大です。台湾人は2千万人もいるのに、新高山は一生かけても登れない人がいるんですよ。

◆南国香港とはいえ、12月の海に飛び込んで泳いでしまう張さんは、若い仲間たちから「永遠の18歳」「ドラゴンのアニキ」と親しまれる元気な高年登山家です。大変な時代を生きてこられたはずなのに、明るく笑って話してくださるその姿に感銘を受けました。どうもありがとうございました。